

2016年3月25日発行

地域と協同の 139号

研究センターNEWS

巻頭エッセイ

人と人は「協同する」ことで、 共に成長する ことを実感

— 「協同体験セミナー」の実践から感じること —

生活協同組合大学生協東海事業連合 石橋純子



NEWS137号巻頭エッセイでご紹介くださったように、2015年度から、コープあいち・南医療生協・大学生協でつくる「社団法人協働・夢プロジェクト」では、大学生に、もっと協同社会に触れる機会を地域で暮らす多世代の方々との接点を創ることを目的に「協同体験セミナー」を実施しています。第12回東海交流フォーラムでは、8名の学生が参加し、地域の実践事例に耳を傾け、心を寄せ、多くの方と言葉を交わし、「協同することで自分の暮らすまちを自分たちの手で『ゆたかに』すること」ができる可能性があるということを感じてくれました。

「協同体験セミナー」は、さまざまな切り口で、「協同」による、まちづくり・食づくり・健康づくり・くらしづくり」を体感してもらうことを大切にしています。一種の閉鎖空間ともいえる大学内の生活(勉強とアルバイトの往復)だけでは味わいにくい経験〜『自立』した仲間(互いの存在を認め・尊重しあう)が手を取り合い、『協同』し、自分たちのくらしを自分たちで「ゆたかに」する〜を多世代で、そして、生協やお取引先様などの様々な関係の中で体験していく。そんな場に、2015年度はのべ83名の学生が参加しました。複数回参加してくれた学生は、まるで理科の化学実験で見られるような反応を見せてくれました。毎回提出してくれるレポートを読むたび、その反応(変化)がうれしく、私自身、彼女たちを通して生協で働くことの意味を再確認する機会となりました。とくに、就職活動中の学生にとって、南医療生協の組合員理事や東海コープ商品検査センターの職員との会話は「自分の一生の仕事は何か?何を大事にしたいのか?」を真剣に考える機会となり、進路選択に大きな影響を与えるものでした。「人任せにしない」大人との出会い、「互いに足りないからこそ、ともに手を取り合い補い合っている」大人との出会い、自分の祖父母と変わらない年齢の大人が、年齢や老いに関係なく、隣人の困りごとや暮らしているまちの課題に「我が事」として行動していることに刺激を受け、自分もその社会の一員になりたいと感じてくれる学生がいる。以前、野田味噌商店野田社長が「食育を始めたなら止められない」と教えてくださいましたが、この取り組みもゴール(終了)はないのだろうと感じています。一人でも多くの学生が参加する取り組みに育てていけるよう、引き続き、皆様のご関心をお寄せいただき、また、お力をお貸しいただければ幸いです。

CONTENTS

巻頭エッセイ	
人と人は「協同する」ことで、共に成長することを実感	1
2月13日愛知における協同組合連携を推進するトップセミナー	
「地域社会の持続可能性と協同組合の役割」	2-3
研究フォーラム食と農 「食と農を考える学習会」	
「私たちは、どう地域農業を支えていくのか」	4
情報クリップ	5~7
企画案内・書籍案内	8

研究センター 3月の活動

2日(水) 事務局会議	4日(金) 理事ゼミナール 修了式
7日(月) くらしを語り合う会/NEWS編集委員会	
11日(金) 常任理事会	
／研究フォーラム職員の仕事を考える世話人会	
15日(火) 国際協同組合デー記念行事相談会	
16日(水) アジアの平和、食と文化 実行委員会	
17日(木) 三河地域懇談会世話人会	
18日(金) マイスターコース企画委員会	
24日(木) 組合員理事ゼミナール世話人会	
25日(金) NEWS発送	生協の(未来の)あり方研究会
31日(木) 名古屋市立大学協同組合寄付講義 開講準備会	



「愛知における協同組合連携を推進するトップセミナー」

の持続可能性と協同組合の役割

●国際協同組合同盟(ICA)が定めた世界共通の協同組合のマークです。

2月13日「愛知における協同組合連携を推進するトップセミナー」が、2016年国際協同組合デー記念行事相談会（JA愛知中央会、コープあいち、大学生協連東海ブロック、南医療生協、北医療生協、地域と協同の研究センター）主催で組合員、役職員のべ135名の参加で行われました。世界の協同組合の経験に学びつつ、よりよい社会を築くための協同組合の地域社会での役割とその可能性について考えあうことを目的に開催されました。セミナーでの講演と、3つの分野における事例発言、いただいたコメントの概要を紹介します。（文責：事務局 鈴木）



□講演 「地域社会の持続可能性と協同組合の役割」

日本生活協同組合連合会 専務理事 和田 寿昭 氏

この間の世界と日本の協同組合の議論、協同組合の連携の取り組みをお話したいと思っています。今こそ協同組合同士が連携し、地域をささえる、役割を果たす時期にきているという問題意識を持っています。

◆世界の協同組合の動向・方向性

76カ国・2829の協同組合の売上高を集計すると、日本円で354兆円になり世界の協同組合の経済に占める割合が年々増えています。世界の経済成長率がリーマンショック以降、低成長率で続いています。協同組合は3%伸びたと言われています。昨年10月に国連総会があって、あらためて設定したのが、2025年までの「持続可能な開発目標」です。環境問題は途上国の問題ではなく、すべての国々に共通する大きな課題です。飢餓や貧困は深刻で、人口が増えて生きていくのに、きちんと食料が届けられるのかが課題になっています。また、ジェンダーの問題、雇用やディーセントワークの問題などが提起されています。国連の成果評価をふまえて、ICA（国際協同組合同盟）として、単純にIYC（国際協同組合同年）で終わらせるのではなく協同組合の発展につなげていこうとつくったのが「協同組合の2020年に向けてのブループリント」です。

◆ICAが提起したブループリントと私たちの課題

ブループリントでは、IYCの成果を受けて、目指す方向性を提起しています。一つは「経済、社会、環境の持続可能性において定評あるリーダー」になっていこう。二つ目が「人々に最も好まれるモデル」になっていこう。三つ目が「最も急速に成長する事業形態」になっていこうということです。

戦略として、5点掲げています。一つは、「参加」の問題です。組合員の出資活動など、強みである参加をさらなるレベルに引き上げるといことです。二つ目に「持続可能性」です。一貫して大事にしている地域の持続可能性の構築者であると位置づけてもらえるようにということです。三つ目に「アイデンティティ」です。原則に立ち返り、なんのために活動しているか、逆に問いかけています。四つ目は「法的枠組み」です。国や行政の施策としてしっかり協同組合が育成できる法律等、環境整備して欲しいということを明確にあげています。五つ目は「資本」の問題です。途上国における協同組合を育成するための資本をどう確保するかということです。議論になったと聞いています。2010年代のはじめ、イギリスのコープ銀行は住宅関係の信用組合を買収し不良債権を抱えました。グローバル企業、世界的な企業と同質化を求めていくのか、差異化を求めていくのか、資金運用ができるのか、市場に求めるのか、課題になってくると思います。

トルコの総会で、「ガイドンスノート」を提起しました。2011年総会で、第7原則「コミュニティへの関与」を改訂して、環境、地域の持続性の問題に役割を果たすことを入れられないかと提起があり、議論をして結果的には改訂しないことになりました。もともと第7原則には、持続可能性が意識してつくられていましたが、改めて内容を紹介するものをつくったらどうかとなりました。どういう原則があって、その内容をきちんととらえられるようにすることと、今の状況をしっかり解説しようというのがテーマになっています。世界で取り組んでいる協同組合の実態、状況が見えてきます。2016年は、協同組合原則を学ぶ年にしたいと皆さんにお伝えしたいと思います。

◆地域社会における協同組合の役割

「ブループリント」に基づく実践をふまえて、これから私達は、日本の地域社会の中で活動をしていきたいと思っています。取り組んでいく上での視点です。新しい問題に、事業を通して解決する、その役割を考えたいと思います。二つ目は、昔、賀川豊彦が「協同組合とはどういう組織か」と問われた時に、たすけあいの組織と解説していました。地域の中で人々をつなぐ、それが協同組合の仕事だと思っています。三つ目に、単体ではできることが多くなく、諸団体と連携すべきだということです。生協も地域の一員に入れてもらい、生協から地域を見るのではなく、地域の視点で生協の事業をとらえ直すことで、行政、社協、自治会、農協をはじめとしたみなさんと横の連携が広がってきています。四つ目は、社会的に排除されてきた人たちも、排除されつばなしではなく、生き生きと地域で活動できる場ができるかという社会的包摂の視点で、私たちの事業もできないだろうかということです。

◆協同組合間連携の可能性

今回の農協法改正で、営利を目的として事業を行ってはならないという第7条が削除されています。農業所得の増大に

最大限の配慮をし、「投資又は事業利用分量配当に当てる」、これが新設されています。そういう法律改定は協同組合否定につながります。今、一般の株式会社以上に「ブループリント」が言っている協同組合モデルが日本社会でも認められるものにしていかないといけないと思います。農協法はすばらしい法律で、地域社会に貢献できる法律は他にないと思います。これからも地産地消一緒にやっていきたいと思っています。連携して地域をいかに元気にするか、事業モデルを増やさないといけないと思います。これこそ生協だけでも、農協だけでもできない、横の連携があって初めてできることをみなさんとともにつくっていききたいと思っています。

■意見交流

食と農① 「農業が地域社会の中で果たす役割とJAの存在意義」

JAひまわり 専務理事 今泉 秀哉 氏

産消提携をすすめる上での経済事業にとっては適正規模があり、事業提携のあり方をもっと不断に追求していかないと。コープあいちとくらし全般に関わる問題であるとTPP学習会を開催しました。食と農の活動、6次産業化などで消費者団体と一緒にする視点が求められると思います。

食と農② 「＜協同組合連携の取り組み報告＞食と農の関わり」

生活協同組合コープあいち大府センター副センター長 鈴木 章人 氏

JAあいち知多とコープあいちの尾張南ブロックで年度の振り返り、次年度の活動の相談をしています。早朝収穫のともろこしをその日のうちにお届ける企画をしています。生産者の生姜を使って、組合員とメーカーが一緒になって、新商品「国産野菜3種のしょうゆしょうが」が誕生しました。生産者の想いを組合員へ伝えるパイプ役として、組合員に食と農を広げていきたいと思っています。

医療・介護・福祉③ 「“おたがいさま”でささえあう つながりづくり、まちづくり～南医療生協のおたがいさま運動～」

南医療生活協同組合非常勤理事 西尾 聡子（にしおさとこ）氏

地域に、ささえあい、たすけあいのネットワークがあり、1人の「困った」に寄り添う「おたがいさま運動」を昨年の総代会で決めました。おたがいさまサポーターが923名いて「おたがいさまシート」を出し合うということで、安心、ささえあいの活動を行っています。医療介護というと、職員ががんばるのがふつうですが、組合員、地域とも主体で、おたがいにやっていこうとやっています。

次世代につなぐ④ 「協同体験セミナー事例発表」

全国大学生生活協同組合連合会東海ブロック学生委員愛知県立大学4年 杉浦 甘奈 氏

南医療生協、コープあいちなど、他の大学生協以外の生協の見学、その組合員さんとの交流をさせていただき、味噌蔵や養鶏場などの産地見学をしています。印象に残ったのは、自分たちの生協だという意識が違う、生産者の方の言葉で「農業は畑を耕すことではなくて、人を育てる食べ物をつくっている」です。生協があるから、人がつながり、人の生活を豊かにするというのを感じました。

■コメント 名古屋市立大学大学院経済学研究科特任教授 向井 清史 氏

協同組合連携というのが、着実にすすみ、非常に貴重なことだと思います。日本では協同組合法は個別、縦割りです。これまではスケールメリットが求められ、合併による規模拡大が行われてきました。横の相互のつながりは、一般の経済領域では、シナジー効果とか、バリューチェーンという言葉で表現されますが、協同組合は縦割りで、ここに注目されてこなかったと思います。補完しあうようなシナジー効果を求めて、協同組合の改革が、一つの方向として徐々に見えてきて、いい方向に向かっているのではないかと思います。また、「ブループリント」は、もっと読み込む価値のある文書だと改めて思います。例えば、第2章持続可能性のところ、株式会社の事業モデルのことを、利益を私有化し、損失を社会化しようとするモデルだとまとめています。これはまさに分断のシステムです。これに対して求心力を持っているモデルである協同組合が一つの軸として鮮明になります。「協同組合は特定の利害関係者の利益を『最大化』するのではなく、様々な利害関係者に対する成果を『最適化』することを目指す」と書いてあります。協同組合のアイデンティティを考える上で非常に重要な論点になっています。この「ブループリント」を丹念に細かく読むと、今までの協同組合観を一新する視点も含まれています。これを深めていくことが協同組合陣営にとって求められている課題だと感じました。

■コメント 日本生活協同組合連合会 専務理事 和田 寿昭 氏

今日の話では、協同組合同士が何か具体的なテーマがはっきりした方が、より具体的に連携がすすむことが分かりました。それぞれの協同組合の人たちが知恵や人や多少お金もだしながら、地域のくらしの向上につながることで少しずつ課題やテーマをはっきりさせていくことが大事です。小水力発電を復活してやろうと森林組合、農協、生協と一緒に再開しようと協同組合の連携がすすむこともあります。また、介護医療の連携なくして地域をささえることは難しくなっています。地域生協は組合員がたくさんいますが、医療と連携できたらもっと地域貢献できます。愛知県では、厚生病院たくさんあります。農協のみなさんとの連携も大事です。地域にある資産をもちよって、地域のくらしに貢献する連携をすすめ、協同組合モデルはいいよねと全国に発信していただけるといいと思います。



2月26日研究フォーラム食と農

食と農を考える学習会

「日本農業は持続可能か」

文責：事務局 鈴木

「私たちは、どう地域農業を支えていくのか」

2月26日(金) 「日本農業は持続可能か〜私たちの食と地域農業へのかかわりから考える」をテーマに「食と農」を考える学習会が、25人の参加で行なわれました。大原興太郎氏(三重大学名誉教授・松阪協働ファーム取締役会長)に講演いただきましたので紹介します。

◆大原興太郎氏講演の概要◆

日本に農業が残っている方がよいと思いますか?海外から食料が入ってきて食料自給力が下がってきました。経済力があれば生きるはそれなりにできます。農業が残った方がよいと思う人が多いようです。では、どうして残していくのか考えていきたいと思います。今の日本は、食やそれを支える農業、そして介護、福祉の問題で、一定の地域でそれなりに回れば大きな経済発展がなくても人々の幸福は確保できると思います。1961年に農業基本法ができ、それまでの農業のあり方を、規模拡大路線・自由化路線に大きくシフトしてきました。その結果「農」の領域はどんどんしぼみ、食料と農業の基礎データでみると自給率、農家人口、農家戸数、耕作地、米の消費など年々減少しています。

○「日本農業は持続可能か」—注目したキーワード テーマを考える上で私がキーワードだと思うことです。①「成熟社会、地域の創生時代…今の時代の課題」—今は1960年代以前とは違います。②「日本農業の個性農地…風土と農業、一変わりにくいものの本質」—農地は大事な要素があります。植物工場的な発想もありますが、それでは稲作、麦づくり、そばづくりはできません。③「TPP、日本的構造改革市場…世界との関わりと日本独自の問題—世界市場・地域の農業」—個人的にはもうちょっと関税はあってもよいと思います。④「日本農業を背負う人、担い手1300万人」—明治以降1960年代まで日本での農業就業人口は変わりませんでした。しかし20年後は、下手したら現在の200万人が100万人を切ります。そうすると39%の自給率の維持は大変です。⑤「何を変えなければならないのか(Adaptive)」、⑥「農業観の転換、考え方…CSA—国民に支えられる農業」—農の「考え」方です。⑦「生活基盤、自立(生物の原点)…生活者の視点」—「自立」は生物の原点です。そういう項目で考えたいと思います。

○「農」「食」をめぐって 「農業」というと他の産業と同列に扱いますが、「農」というと生命維持、農村文化、歴史の維持などを含めて言っています。食の問題では、食の安全にしても、自己判断する能力を養ってきていません。賞味期間切れてすぐ捨てないといけないとなります。フードバンクに出してもらえればと思います。半農半Xについては、半分が農業で、Xは何が入ってもいいですよ、あと半分で農的暮らしを楽しみましょうということ。人が生きていることをどう仕組みにするか、その工夫がどうできるかだと思います。

○地域で“つながり”をつむぎなおす 農産物直売所ではモノを売るだけでなく、イベント・試食会で、新しい作物の食べ方を紹介します。消費者と生産者がそこで出会います。基本は地域のもので、共に成り立っていくことがないと商品での扱いだけでは負けてしまいます。食べ方の主張ができるのは直売所の持ち味です。移動販売は、成り立っていません。そこにどういう機能を加えたりするかということです。電球の付け替えなど有償のほうが頼みやすいです。そういう新しい仕組みをどうつくるのかということだと思います。今の社会の課題の一つは、便利になって自由度は保障されるようになりませんが、自分の体が悪くなったり、お金がなくなったりすると、人とのコミュニケーションが苦手な場合、たちまち不便になります。イベントや体験をして、コミュニケーションをとることが大事です。自然に触れる機会が、若い人や小さな子供には少なくなり、それをどう回復するかということだと思います。

○市民、国民が支えられる農業 一つは、体験型の食の教育をカリキュラムの中に入れます。農業者をつくるということだけでなく、他の農業を基本的に解しているものが流通や工業をしないとうまくいかない、やっぱりいびつになると思います。もう一つが、自然とか、福祉産業に奉仕するのを学校卒業した時に大胆に入れます。現場のニーズを踏まえて社会の対応ができる人間をつくるということです。人間が生きる基本的なこととして農業や介護を経験します。味噌汁が出ない食卓であったり、お茶を急須で飲むことが全くないということですが、食べ方を知らないということとか、自分で入れるお茶の良さなど伝えていくことが大切かと思えます。直売所で、試食、もしくは食べ方の提案をこまめにやっていくことは、次の時代の消費者を育てていくことになると思います。田植えは、単なるノスタルジアでは駄目で、

うまく体験できると良いと思います。作る手間の大変さが喜びになるように、逆転の発想でやってみないと好きにはつながらないと思います。賀川豊彦の時代の貧しさと、今は、違う貧しさがあると思います。生協の取り組みで、新しい視点をみんなで探していけるといいなと思います。



情報クリップ



メインタイトル・特集など 刊行物名・発行所	目次・主な内容	発行年月 判型 定価(税別)
<p>▶3.11からの歩みを考える</p> <hr/> <p>NAVI 2016. 3 768</p> <p>日本生活協同組合連合会</p>	<p>特集 3.11からの歩みを考える ～復興の今とこれから～</p> <p><コープのある風景> コープさっぽろ <こんにちは！生協女子ですっ！> 生協くまもと 木村真衣さん <元気な店舗の運営を学ぶ> おおさかパルコープ ながお店 <宅配・現場レポート> コープネット事業連合 <生協大好きママコブ山さんの 教えて！CO・OP商品> COOPおいしい赤飯 <商品の産地より> 第6回（最終回） マルイ農業協同組合 <想いをかたちにコープ商品> コープ みらい <CO・OPニュースフラッシュ> 生協コープかごしま コープ共済連 <明日のくらしささえあう COOP共済> 生協しまね <生協職員のための接遇・対応の基本> 第12回（最終回） つなぐ <この人に聴きたい> 青山学院大学 陸上競技部監督 原 普 さん フィジカルトレーナー 中野ジェームス修一さん</p>	<p>2016年 3月 A4版 35頁 定価 350～円</p>
<p>▶子どもの貧困の遮断と社会的実践</p> <hr/> <p>協同の発見 2016. 2 279</p> <p>協同総合研究所</p>	<p>■巻頭言 貧困の連鎖を断ち、子どもたちを主権者に 宮下与兵衛（首都大学東京 特任教授）</p> <p>■特集 子どもの貧困の遮断と社会的実践</p> <p>○子どもとつくる地域(まち)づくり —子どもの貧困を越えて— 加藤彰彦（沖縄大学名誉教授 / 協同総研会員）</p> <p>○市民主体の仕事おこし まちづくりと子どもの成長 —「また明日」の日々と実践— 森田真希（NPO法人地域の寄り合い所 また明日代表）</p> <p>○地域をつなぐ「気まぐれ八百屋 だんだん」の子ども食堂 近藤博子（気まぐれ八百屋 だんだん店主）</p> <p>■会員だより NPO法人コミュニティルネッサンス研究所の活動を振り返って ～「社会連帯経営」の理念実現に向けたささやかな歩み～ 加納三千子 （NPO法人コミュニティルネッサンス研究所副代表 / 協同総研会員）</p> <p>■ワーカーズコープで働く若手リーダー紹介（第2回） 地域に根ざす協同労働を目指して 廣瀬 勉 （企業組合労協ながの 理事 東北信事業本部 / 協同総研会員）</p> <p>■協同のひろば 小田原版FEC+M自給圏の確立による原発に頼らない社会の実現に向けて ～地域での実践から考える「地域」づくりのキーワード～ 小山田大和 （エネ経会議事務局局長・かなごてファーム代表 / 協同総研会員） 福島に関わりながら、私ができることは （福島県双葉郡浪江町NPO法人 Jin代表 川村博さんを訪ねて） 杉田 大（労協センター事業団 総務部・広報部 / 協同総研会員）</p> <p>■労協連だより 田嶋康利</p> <p>■研究所だより 岩城由紀子</p>	<p>2016年 2月 B5版 80頁 定価1300円</p>

<p>▶震災から5年の東北で</p> <hr/> <p>医療生協の情報誌 COMCOM 2016. 3 583</p> <p>日本医療福祉生活協同組合 連合会</p>	<p>▶特集 震災から5年の東北で 福島に今起こっていること</p> <p>福聚寺 住職・作家 玄侑 宗久</p> <p>[レポート] 自分たちのまちは自分たちでつくる 被災者自身が新しいつながりを広げる</p> <p>みやぎ県南医療生協 いちご班</p> <p>女性の支援からまちづくりに</p> <p>特定非営利法人 まあむたかた</p> <p>[バンビのつぶやき 38] 夢って強要されるもの 農家民宿ちんちゃん亭 鈴木桂子</p> <p>[子どもを守る! 想いのキセキ 第3回] 大切な友人との別れに涙 娘たちを守るための避難 原発事故被害者支えあいの会「あゆみR. P.NET」代表 井川景子</p> <p>[きらっと★未来 第3回] 松江保健生協</p> <p>組合員の健康づくりから地域の子育て支援へ ろっこう医療生協 上野支部 お手玉あそびたい (隊)</p> <p>[協同のある風景] 238 組合員が地域支援包括センターを訪問 ～支え合いの地域づくり～ 富山医療生協</p> <p>生きる (第27回) 今も、耳に残る舟歌 写真家 田邊順一</p>	<p>2016年 3月 A4版 40頁 定価 400円</p>
<p>▶東日本大震災から5年</p> <hr/> <p>生活協同組合研究 2016. 3 482</p> <p>(財) 生協総合研究所</p>	<p>■ 巻頭言 東日本大震災が遠くありませんか 岩田三代</p> <p>▶特集 東日本大震災から5年</p> <p>震災5年目、飯館村民の生活、コミュニティ再建に向けて</p> <p>－除染の限界と自然共生居住権の再構築－ 糸長浩司</p> <p>コミュニティを支える空間</p> <p>－気仙沼市小泉地区のこれまでとこれから－ 森 傑</p> <p>福島県農産物はなぜ基準値を超えなくなったのか? 小山良太</p> <p>被災企業の復興状況と異業種連携による商品開発の試み 石原慎士・李東勲</p> <p>岩手県の復興状況といわて生協の取組み・今後の課題 金子成子</p> <p>共生できる協同のある地域をめざして 小澤義春</p> <p>震災復興に向けたコープふくしまの取組み 今野順夫</p> <p>福島県への支援と茨城県での災害対応で見てきた課題について 松尾 掌 宮田育治</p> <p>核害の街で生きる 志津川事情を語る④ 佐藤俊光・高橋源一 (聞き手: 鈴木岳)</p> <p>特集② 生協共済研究会報告</p> <p>「共済と保険の違い」テーマに研究 岡田 太</p> <p>保険募集制度の見直しと生協共済にとっての課題 江澤雅彦</p> <p>欧州のミューチュアル保険・協同組合保険組織協会 斉藤慎吾</p> <p>■ 時々再録 被災地は語り続ける 白水忠隆</p> <p>■ 海外情報</p> <p>第9回国際サードセンター学会アジア太平洋大会 山崎由希子</p> <p>■ 研究と調査</p> <p>柳田国男の消費組合論 (下) 堀越芳昭</p> <p>■ 本誌特集を読んで (2016・1) 柴田文隆・松本 等</p> <p>■ 私の愛読書</p> <p>三浦将 『自分を変える習慣力』 浅野由樹子</p> <p>岩崎夏海</p> <p>『もし高校野球の女子マネージャーが ドラッカーの「イノベーションと企業家精神」を読んだら』 寺田 真</p>	<p>2016年 3月 88頁 B5版</p>

<p>▶福島県3.11からの復興と地域づくり</p> <hr/> <p>文化連情報</p> <p>2016. 3 456</p> <p>日本文化厚生農業協同組合 連合会</p>	<p>農協組合長インタビュー（25） 次世代対策としての正組合員化への挑戦</p>	金子光夫	<p>2016年 3月 B5版 80頁 文化連情報 編集部 03-3370- 2529 *注</p>
	<p>院長リレーインタビュー（286） 病院を核にした地域包括ケアを構築するために 二木学長の医療時評 「保険医療2035」を複眼的に読む ～「パラダイムシフト」の幻想 平成28年度厚生連院内感染予防対策研修会を開催するにあたって</p>	<p>鷹津久登 二木 立 仲川賢治</p>	
	<p>基礎の再確認から「感染予防対策のゴール」をめざす</p>	天野有一 榊井五月	
	<p>エビデンスに基づいた実践へ 病院建築と環境（8） 院内感染とその対策 農村医学運動は世直し運動！～私の歩んできた道(12) 「創る会」は、「医」「食」「農」運動へ……</p>	柳 宇 小山和作	
	<p>地域産業との連携による再生可能エネルギーの新展開（8） 静岡県菊川市のお茶栽培における太陽光発電設備の活用</p>	大平佳男	
	<p>医食同源 医療の現場を食から支える（2） 入院患者さんに食事の楽しみを・・・選択メニューとバースディメニュー</p>	石川知子	
	<p>福島原発事故被災と健康の将来（7） 求められる生涯にわたる健康調査 福島県 3.11からの復興と地域づくり 海外の医療メディエーション（最終回） 台湾・中国での医療メディエーションの展開</p>	安藤満 西出健史 和田仁孝	
	<p>第64回日本農村医学会ランチョンセミナー開催報告 第2回 LCC事例発表 ② 移転に伴う新規放射線機器の保守契約 CT・MRIにおける医療機器稼働管理の現状報告 大型医療機器導入から保守までのLCC戦略</p>	遊佐直道 西田達史 関 幸司	
	<p>ゲーテターク、ドイツ（18） グリム童話と森 - ドイツ人と森</p>	鵜殿博喜	
	<p>デンマーク&世界の地域居住（82） オランダの革新 ③ 社会住宅と住宅協会</p>	松岡洋子	
	<p>デンマーク・ドラワー市の地域包括ケア（4） 高齢者ケアの課題</p>	小磯明	
	<p>野の風 あずましく くらすこと</p>	鈴木眞弓	
	<p>DVDビデオ紹介 支えあって生きる 社会的企業が紡ぎだす連帯経済 線路は続く（96） 大船渡線BRT被災地を走る</p>	高橋章子 西出健史	
	<p>最近見た映画 火の山のマリア</p>	菅原育子	

地域・協同の運動、協同組合に関する文献資料、協同組合・生協関係の研究所などの調査研究成果や研究センター会員の研究成果などから、比較的入手しやすいと思われるもの、寄贈いただいたもの(♣)などを中心に順不同で紹介しています(主な内容は目次等から事務局が要約しています)。詳細は研究センター事務局までお気軽にお問い合わせください。

企画案内

40年沖縄復帰企画作品 映画会

ひまわり ～沖縄は忘れないあの日の空を

日時：2016年4月29日(金) 上映時間/①10:00～ ②14:00～ ③19:00～
 場所：ケアハウスささゆり1階地域交流ホール 岐阜市北山1丁目15番25号
 会費：前売り券 大人/800円 小中校生/500円 当日券/大人1000円 小中校生/500円

そのジェット戦闘機は炎上しながら校舎に激突した。繰り返される沖縄の悲劇。実際の事件を元に今の日本に問う感動の意欲作。

監督：及川善弘 出演：長塚京三 須賀健太 能年玲奈 福田沙紀 その他

1959年6月30日、突然、米軍ジェット戦闘機が炎上しながら小学校へ激突した。悲鳴を上げながら逃げまどう子供たち、良太は広子を助けようとしたが既に息絶えていた。校庭には一平の変わり果てた姿があった。悲しむように花壇にはひまわりが風に揺れていた。

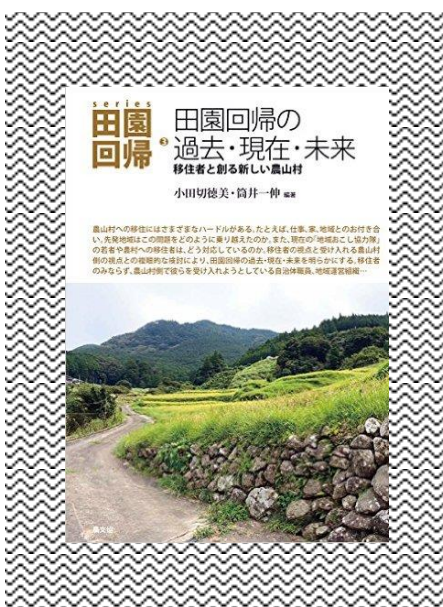
それから53年目の2012年、年老いた良太は妻をうしない娘の家で暮らしていた。孫である大学生の琉太はゼミの仲間とともに宮森小ジェット戦闘機事件のレポート活動を始めるが、頑なに事件の真相をかたらない良太など、宮森事件の傷跡は今も深く遺族の心を苦しめていた。

●主催：「高齢者施設をつくる会」TEL058-244-1200

協賛：「岐阜健康友の会」 TEL058-244-3522

「新日本婦人の会 岐阜県本部」 TEL058-215-7502

書籍案内



シリーズ田園回帰

田園回帰の過去・現在・未来 移住者と創る新しい農山村

著者小田切徳美編著 筒井一伸編著 定価2,376円 (税込)

発行2016/02 出版農山漁村文化協会(農文協) 判型/頁数A5 232ページ

内容

農山村への移住には様々なハードルがある。たとえば、仕事、家、地域との付き合い。先発地域はこの問題をどのように乗り越えたのか。また、現在の「地域おこし協力隊」の若者はどう対応しているのか。田園回帰の過去、現在、未来を明らかにする。

目次

序 田園回帰の概況と論点一何の問題とするか—

第I部 先発地域に見る田園回帰—那智勝浦町色川地区の全体像

第II部 田園回帰の why と How—背景とプロセスから読み解く—

第III部 田園回帰の課題を超える

第IV部 田園回帰の論点・戦略・展望 新しい社会への窓口

農山漁村文化協会ホームページより

研究センター 4月の活動予定

2日(土) とうかい食農健サポートクラブ「伝統野菜ってなあに？」学習会

6日(水) 尾張地域懇談会「わいわい子供食堂」見学

7日(木) くらしと生産をつなぐものづくり準備会

／NEWS編集委員会座談会

8日(金) 研究フォーラム(パネル)食と農世話人会

／尾張地域懇談会「ポトスの部屋」見学

13日(水) 研究フォーラム環境世話人会 14日(木) 常任理事会

15日(金) 研究フォーラム職員の仕事を考える

18日(月) 尾張地域懇談会世話人会

19日(火) 岐阜地域懇談会世話人会

／研究フォーラム地域福祉を支える市民協同世話人会

23日(土) 理事会 26日(火) NEWS発送

2016年3月25日発行(毎月25日発行)

定価200円

(税・送料込み。年会費には購読料が含まれています)

発行 特定非営利活動法人地域と協同の研究センター

代表理事 西川 幸城

〒464-0824 名古屋千種区稲舟通1-39

TEL 052-781-8280 FAX 052-781-8315

E-mail AEL03416@nifty.com

HP http://www.tiiki-kyodo.net/